現代社会と感情・序説

Modern Society and Emotions : An Introduction

岡 原 正 幸*

Masayuki Okahara

木 田 邦 治**

Kuniharu Kida

The study of emotions has been mainly in the hands of psychologists and physiologists. But the sociological-historical approach to emotions helps to clarify the social, cultural, relational, and rule-embodied factors of emotional feeling. In this paper, it is presented that several emotions, as well as subjectivity, personality, consciousness and individuality, are products of the emergence of new forms of power. It is when disciplinary mechanisms of power have become diffused throughout the social body that emotions have been subjectified and have become an target as the "calculable soul". Power affects affect in the process of the formation of modern society.

1. 序——現代社会と感情

(1) 感情の氾濫 — 現代社会をめぐる諸々の事象・言説という舞台に「感情」は欠かせない。感情を押し殺した稀薄な人間関係、愛情の過剰や枯渇に起因する精神的不安・人間疎外・いじめ、何事にも深くコミットしないシラケの心性、風情や情緒の喪失、あるいは「楽しい」「面白い」などの「感性」や「感じ」を行為指針とする新人類、恐怖や残虐さを楽しんじゃうホラーブーム、家族的甘えと情緒的一体感を求めるサークル人間、神秘的経験と心の安定を提供する新宗教の流行。そうかと思えば、商品戦略の王道となった「感性」、消費社会を読み解くためのキーワードとしての「感性革命」「感性消費」「表現社会」、自己啓発・自己解放を目的とする感情コントロールのノウハウを売る企業、成功・恋人作り・リラックスの仕方を売る企業、「楽しみ」を売るレジャー産業の隆盛、ちまたに溢れる『心理学』関係の雑誌・書物など（まさに『情緒産業』による心・感情の市場化である）。これらの事態をいかに価値評価するかは別として、とにかく今、感情の氾濫を指摘することができる。

(2) 感情抑圧の終焉、徹底、それとも・・・ — 感情の氾濫をいかに解釈すればよいだろうか。近代テクノロジー文明の合理性が人々に強いていた感情抑圧の要請が変容して、抑圧の時代が終焉を迎えたのか。そんなはずはない。疎外・いじめ・アパシーなどの社会病理がある。では、抑圧が徹底化され、押さえ付けられ蓄積された抑圧感情が堪まりかねて怨念の如くに噴出した結果なのだろうか。その割には脳天気な明るい。問題は別だ。近代合理性は、上の二つの意見が共有する様に、本当に感情を抑圧してきたのだろうか。確かにそのように意識される事態もある。だが、近代合理性の申し子たる官僚制や工業生産で

---

* 慶應義塾大学非常勤講師

** 慶應義塾大学大学院博士課程

さえ単なる抑圧ではなく、「感情の状態を指定し」「感情のある特定のあり方を要求し、さらにそれを制度化する」[Berger/Berger/Kellner 1977 37, 63]。つまり近代社会は人々の感情経験の外側であって、それに対立しそれを抑圧するとは安易に言えないのである。むしろ人々の感情経験を作り出し、それを社会編製の要諦にしているかもしれない。すると感情氾濫という事態への視角も変わらざるをえないだろう。本稿の課題は、このような観点から、現代社会における感情現象の社会的歴史的側面を完全に理解する、そのための素描を作り上げることである。

2. 感情と社会

(1) 感情社会学 — 1970年代後半になって、感情や感性の解放を目指した社会運動の隆盛や家族成員の情緒的関係の社会問題化、あるいは人類学や社会史とくに心性史などの諸成果による感情の文化的歴史的相対性の発見など、こういった社会的・知的背景の内に感情社会学(Sociology of Emotions)という理論運動が新たに展開される。感情社会学は感情一般を主題化してとくにその形成過程を社会的構成としてモデル化する。例えば、個別的な諸感情を、社会関係の諸様態(当事者間の権力・地位関係の過不足とその責任主体)の認知から説明するKEMPER[1978a, 1978b]。感情形成を、状況と感情の間の適／不適を規定する社会的に共有された規範(感情ルール feeling rules)と、個人が遂行する内的状態への意識的介入(感情操作 emotion management)の所産とするHOCHSCHILD[1979, 1983]。役割取得感情(role-taking emotion)による社会統制へ注目するSHOTT[1979]。相互作用において生起する自己感受(self-feeling)として感情を考察するDENZIN[1983]。これらが代表的である。感情社会学の諸業績は相互に対立点[Kemper 1980, Shott 1980]を残すが、感情経験には「規範が関与しているという共通の認識がある」[山田 1987 115]。

(2) 感情の現実構成の規則 — 感情経験への「規範関与」の内実を明瞭化するため、感情社会学の各論者がそれなりの距離を取りつつも自身の理論構築における礎としたSCHACHTER/SINGERの感情理論に言及しよう。彼らの感情論を図式的に解説する[Schachter/Singer 1962]。感情形成の初発には刺激による生理的興奮の喚起が位置する。自己の身体に生理的興奮 — それはアモルフで画一的とされる — を感受した個体は、次に、その生理的興奮の評価・帰属 — ある特定『感情』としてのラベリング — を行う。平たく言えば、興奮の原因を何処かに求めて、その場にある自分の興奮状態を感情語(ラベル)で説明するわけである。その際、外的刺激(あるいは状況一般)の認知が原因帰属を導くとされるが、問題は外的刺激の評価、すなわち外的刺激の中に感情関連要素(感情経験に当然結びつくとして了解されている事態)を見出すか否かである。もし感情関連要素が見出せない場合、個体は自己の生理的興奮を非感情経験⁽¹⁾として処理し、感情を経験しない。逆に、刺激・状況が感情関連的であると評価された場合にはじめて、個体は自己の身体的状態のある特定の感情として経験する、とされる。

以上のSCHACHTER風感情論には、様々な心理学的批判・修正[Reisenzein 1983]の他、感情語の形成・保有機構を主題化する必要性[廣松 1986a 221]が問われている。われわれもこの『感情ラベリング論』が内在する生理的興奮の物化・実体視や感情経験における生理的興奮の不可欠性の主張には原理的な疑義を有するけれども、とりあえずここでは現実構成という文脈で、感情関連要素の評価—感情語の選択—を主題的に論じよう。

感情関連要素の評価という作業をエスノメソドロジ的視角からみれば、それは、個々人に共有される解釈装置による状況の秩序化作業といえる[岡原 1987b]。ある文化の成

員はその文化にビルト・インされた規則を使用してひとつの有意義な現実を構成する。この規則は、成員が個別具体的状況の中でその都度文脈依存的に使用する「方法」であり、（従来の社会学の多くが想定したような）外在的実体的に存在しつつ、人々の評価・解釈・行動を一意的に決定する原因と見なされる類の「社会規範」ではない[Leiter 1987 253-]。ここでは、感情経験、感情的行為、感情表出、気分・雰囲気的空間などの総じて「感情的現実」を産出する際に成員が使用する規則を「感情規則」と呼ぶ。するとSCHACHTER が感情経験の構成因とした感情関連要素の評価とは感情規則の使用と考えることができるだろう。われわれが感情経験への社会的規範の関与という場合には、この意味においてである。人々は社会的相互作用の中でその都度の状況に依存しつつ、感情規則を使用してひとつの社会的リアリティーとしての感情的現実を間主観的に構築するのである。さらに、感情経験は状況の構成要素でもある他者との相互作用に、その都度の具体的な形成場面のみならず、発達論的にも依存している — 特に母子関係 — という意味でも間主観的である。

(3) 感情経験の政治性 — 人々が感情的現実構成に向けて使用する感情規則は文化的に相対的であるが、一つの規則体系は他の外部の規則体系の侵入や内部の“逸脱”的規則を排除することで自らを相対的に安定性をもった規則体系として維持・再生産する。⁽²⁾ “規則体系の自己保存”であるが、しかしそれは“規則”なるモノの物象化的存立性格に即した言い方であって、実態において存在するのは人々がその都度の特定の具体的な活動場面で相対的に同型的な仕方で“感じる”ことであり、これによって“規則”はその都度生産される。したがって“排除”を媒介とした“規則体系”の自己保存・自己再生産とは、第一に非同調的感情行為の遂行者の排除（ないし同調性への矯正・調教、サンクション）であり、第二には、一文化内部の諸個人が共同主観的に同型的な感情経験へ自らをその都度“調律”しつつ“感じる”という事としてとらえ返すことができる。

ある状況や行為の生起に対してその場にいる人々が共にある感情を経験する。この場合、所与的事態が感情興発性をもって共同主観的に現われている事と相即して共通の感情経験（共同主観的感情）が成立しているのであるが、この感情的現実の共同主観性はスティックに成立しているのでも、諸個人の“生理・身体”“心理”“精神”なるものの超歴史的・非社会的な実体の同一性に基づいて成立しているのでもない。共同主観性は、諸個人が、自らが一つの項として入り込んでいる社会的相互連関態の「動力的振動」「動力的対抗均衡」の総体に動かされ・動かすことによってかろうじて存立しているのである[廣松 1972 277]。当り前の感情経験が一つの“社会的事実”としての拘束力を有するのも、その感情自体の力によるものではなく、諸個人の相互作用の動力学が感情経験の潜在的可能性を縮減させるような「社会的力」[Marx 1953 111]を生み出し、それが諸個人の意識・感情・行為を拘束することによってである。DURKHEIMは「もしも社会がある種の行為様式を罰しているとすれば、それは、当の行為が社会の基本的な感情を傷つけるからであり、その基本的感情は、ちょうど個人の諸感情が彼の体質や心理構造に根ざしているように、社会の構造に根ざしているのである」[Durkheim 1978 34]と述べているが、「個人の諸感情」からして「社会の構造」—— ないし「権力の網の目の総体」[Foucault 1986 122] —— に“根ざしている”のである[Elias 1977/78]。

ある文化的成員がその文化で一個の主体としての資格を得るには、状況適切的で有意義な感情経験を“構成”できなければならない。それは“感情規則を文脈的に使用しうる主体”であるとも暫定的に言えるのであるが、感情経験の政治的・権力媒介的成立と歴史的

生成への視角——エスノメソドロジーの弱点とされる規則の生成—再生産場面とそこにおける権力の作用 [Giddens 1986 119-21] を主題化する視角——を導入するためには、“規則” “文脈” “主体（主観）” の存在性格を先述したような「動力的振動」の中でその生成場面に即して解明することが必要である。またその際、権力の物象化的錯視（権力を国家や制度的機構なるモノや特定個人が所有し、行使する“道具”とみなすような権力観）にとらわれることなく、権力を関係主義的に「無数の力関係」として把握しつつ、共同主観性を成立させる「動力的振動」を権力作用・関係という切口から具体的に解明することが必要である。ここでは本稿でのテーマと関わる限りでの最小範囲に議論を限定せざるをえないのであるが、ひとたび「主体」をめぐる基底の場面に遡行しつつ、権力と主体化・規律化の関連を一瞥しておこう。

3. 主体化

(1) SARTREは、感情を身体＝心理的な無秩序としてではなく有意義なものとして、すなわち「人間的＝現実の全体を情緒的な仕方の意味し」、「情緒というかたちをとって己を実現する人間的＝現実そのもの」としてとらえ、感情は特定の本質・構造・出現法則を持つと主張している。だがSARTREの場合、感情は「一定の相貌のもとに、人間の総合的全体を全的に表現している」とされてはいるが、志向的なものとして意識の能動性に還元される [Sartre 1957 272]。つまりSARTREは感情を自由な有意志的行為主体による目的達成性という点では、行為一般と同視することになる。このSARTREの感情論に対しては、意志のカテゴリーに属し行為に特有な目的性と志向性を感情の性格へも当てはめてしまったために感情に本来的な受動性が有意志的行為の能動性にすり替えられてしまっている、という批判がある [魚住 1985] が、“有意的行為の能動性” 対 “感情の受動性” という図式を前提とした批判よりも、行為であれ感情であれ、諸個人の自由で自発的・能動的な主体性に起動され・導かれるものとする了解の地平を問題化することが肝要であろう。つまり問題は、SARTREが有意的行為へと感情を引きつけて解釈したことにあるのではなく、感情＝行為が有意的行為一般とともに、それを主宰する内自的各個的な内的エージェントの自由で能動的な所作として説明される構図となっていること、ここにある。

ある感情がある行為（表情を含む広義の行為）を発動させる起動因の相で意識されることは、自己の自由な意志的決定による行為の遂行という意識とともに日常的な経験内容である。いま感情そのものを志向性をもった行為と考えたとすれば、さらにその背後に能作的主体（主観）の存在が想定されることになる。だが、超越論的主観性による世界の意味構成なり、各個人の内面的「動機」や諸個人によって思念された「意味」といった意識現象による身体行為の起動－規制といった図式を守るかぎり、社会や権力を各個的主体に対して外在的なものとみなすような近代に支配的な日常的・学知の思念をしりぞけられないであろう。感情とそれが表現している「人間の総合的現実」を、前提的に設定された「主体（主観）」から解明するのではなく、感情と主体をともに構築するような「現実」が解明されなければならないのである。そのためには「主観性（主体性）なるものを放棄した思考」 [Heidegger 1976 327] へと知が“転回”されねばならないが、歴史的社会的現実のなかでの感情経験の被媒介的存在構造を解明するためには、まずは諸個人の「本質」とその「現実性」が「社会的諸関係の総体」 [Marx 1963 4] であること、諸個人の現実性は「社会全体に張りめぐらされた生産網」 [Foucault 1984 85]＝権力の産出的規制性によって媒介されて歴史的社会的に特定の相で生起していること、それらが具体的に解明されな

ければならないであろう。ここでは諸個人を「主体化」し“感じる主体”へと規律・調教する「権力の技法」——その原基的・原理的機制の一断面をFOUCAULTの議論を手掛かりとしつつ最小限論じておこう。

(2) WEBERによれば、合理的な〈目的—手段系列〉は、それを攪乱させるような非合理的感情を排除するような仕方で行為する主体に諸個人が規律化されていることを要件とする。だが、実態に即して言えば、官僚制適合的行為の遂行としてあるかぎり、行為を発動しうる“起動因”としての感情は何ら問題化されないといえよう。排除・抑制されるのは行為期待に反する行為であって、そこから二次的に、感情が内自的な行為起動因であるという思念が自明裡に前提化されるかぎり、秩序攪乱的な行為を起動する感情・あるいは秩序攪乱的な感情行為（感情表出行為）の排除・抑制ということが秩序問題・効率問題として問題化するのである。

FOUCAULTは、ヨーロッパで18-19世紀に発展する監視と処罰の実践と知が、上の前提的了解（〈内的起動因—行為〉図式）に基づきつつ、身体内部の“精神”の矯正を目指すものとなった次第を明らかにしている。処罰はかつてのように犯罪行為そのものを罰する——その場合行為への罰は行為した身体への罰であった——のではなく、過去においてそれを引き起こし、また将来においてもそれを引き起こすかもしれない“内奥”の“起動因（＝精神・心理）”に標的を定め、教育の実践と心理学的な知を動員しつつ「（服従する）主体」の構築を課題とすることになる[Foucault 1977 23, 131]。この“内奥”に向けられ対象を規律化し主体化する権力は可視性の独自の編制を生み出しつつそこに個別的身体を配置する。それは「一望監視方式 Panoptisme」——見る者と見られる者の関係を個別化し（これによって被監視者は計算調査が可能で取り締まりが容易な客体となり・かつ隔離されつつ孤立化される）、しかも見る者のまなざしが見られる者に見られないように視線を構制する装置——という形象において作動する権力である。

この装置の内部で作動する権力関係は権力者を没入人格化（物象化）する。というのは、「その権力の本源は、或る人格のなかには存せず、身体・表面・光・視線などの慎重な配置のなかに、そして個々人が掌握される関係をその内的機構が生み出すそうした仕掛けのなかに存している」からである[204]。この権力関係は、その内部から誰かが見ていると被視者が承知している（だが見ている者の姿とそのまなざしは見えない）中央塔というモノ——そこへは人々の相互連関関係において機能する装置全体の機能的効果が物象的に付着している——と、個々の被視者との関係として現われ、したがって中央塔の監視者は誰であってもよい、あるいは不在であっても——だから、カルヴィニズム的な神がそこに居ても——よいのである。そのため監視する視線が己の身体に現実に向けられているか否かにかかわらず人は被視存在として常時存在することになる。かくて権力は自動化する。

「可視性の領域を押しつけられ、その事態を承知する者は、自ら権力による強制に責任をもち、自発的にその強制を自分自身へ働かせる。しかもそこでは自分が同時に二役を演じつつ権力関係を自分に組み込んで、自分が自らの服従強制の本源になる」からである[204-205]。また一望監視装置では、見られるものは、個々の独房へと分割されて可視性を押し付けられるのであるが、独房は原理的には“等身大”にまで縮小され得る。しかもこの一望監視方式は、「一般化が可能な一つの作用モデル」「日常生活と権力との諸関係を規定する一つの方法」「理想的形式に縮約れた或る権力機構の図解 diagramme」であって、特定の用途から切り離してあらゆる部面に応用され得た政治技術上の一つの形象である[207]。それは工場、学校、精神病院などに応用されうるだけでなく、その他の日常生活

の領域にまで分散する。というのも、このダイアグラム内部の監視人の位置に入り込む者は誰であってもかまわず、しかもその人を監視へと駆り立てる動機が何であっても（知的好奇心であれ、意地悪さであれ、いたずらであれ）よくなる[204]——「〈一望監視装置〉とは、各種各様な欲望をもとにして権力上の同質的な効果を生む絶妙な機械仕掛けである」[204]——とすれば、見られる者と見る者の関係は逆転可能であって、誰もが監視者でありつつ同時に被監視者でもありうるからである。中心とその周囲の独房の円環という装置のダイアグラムが発揮するような「規律化機能」は施設というモノが生み出すのではなく、全員が共犯的に成立させる「力の場全体」の機能であって、（逸脱への懲罰の発動を潜在的に含んだ）相互に絡み合い転位しつつ監視し合うまなざしの相互作用の効果であるから、特定の施設なき日常空間へも拡散可能なのである。

この匿名的・非人称的で常時向けられ、社会的相互作用の網に内在し、かつ社会的行為を統御するまなざしの座とは「一般化された他者」の座であるともいえよう。この「一般化された他者」がそこから監視する場所としてすべての具体的な具身の他者が監視者として現われることになるし、さらにはそれは「不可視の視線」としての不在性において逆にいつ・どこでも諸個人を監視・統御する偏在的・恒常的な圧力となり、可視的身体はいつでも監視されるものとなる。だが、あらゆる社会において成員は特定のコードに随順的な行為を要求されるのであるから「一般化された他者」のまなざしの存在それ自体は文化汎通的な事態であるといえる。しかし、FOUCAULTが一望監視方式で図式化したような近代社会における「一般化された他者」のまなざしの特質が看過されてはならない。それは、諸個人を個別化し、内面性を作り出しつつそこに引き込み、諸個人の行為をたえずその内面に存する個的身体内部のエージェントに結びつけ、内自的エージェントに向かってたえず規律化すべく働きかける（主体化する）まなざしなのである。諸個人の身体に可視性を強制することで身体内部の内面性を被視者の意識に生み出し、良心や自己認識により各人を己のアイデンティティに結びつけ、主体化する権力の形式である[Foucault 1984a 238]。

視線編制による主体化は言説的な主体化の権力形式、すなわち「自分自身の行為と志向の認知としての告白」によって補強される。“自己の真実”の告白が「権力による個人形成という社会的手続きの核心に登場」する[Foucault 1986 76]のであるが、この（キリスト教における司牧者と信者との関係に由来する）権力(pastoral power)関係においては、“視－被視”関係は自己の内奥の秘密（特にセクシュアリティ）を語る者と聞く者との関係に取って代わられる。近代社会において告白は、最も日常的な次元から最も厳かな儀式にいたる次元（裁判、医学、教育、家族関係、愛の関係等々）の諸関係にその作用を分散する。キリスト教の悔悛・告解から今日に至るまで、性が告白の特権的な題材であったし、FOUCAULTの主眼も性を主題化する告白の権力技法にあるのだが[79]、しかし一般に、〈私〉を主語とする“内的真実の物語”を〈私〉に語らせることによって意識現象を〈私－私〉＝自己同一的主体へと帰属させる言説作用——「告白とは、語る主体と語られる文の主語とが合致する言説の儀式化である」[80]——として告白を理解することができる。それは語る〈私〉と語られる〈私〉を分裂させつつ、聞く者の〈私〉に関する解釈において／また語る者のその言表行為によって“内面性”——逆説的ではあるが、他者への言表可能性をもつものとしてそれは現出する——を自己の存在の固有性として自認する主体を生み出すのである。告白は人間の《assujettissement》を生み出すのである[79]。

(3) ところで被視存在とは単なる可視的身体ではないし、語る主体は単なる言語主体でもないこと、このことは明記されなければならないであろう。

一望監視装置が効果を発揮するには、違反に対する懲罰の発動の可能性がまなざしに含意されていなければならないはずである。すでに“社会化”された者にとっては、“懲罰”は通常はもはや無用であり、他者にまなざしを向けられるということが負のサンクションの効果を発揮し、行為の変更・中止がなされうる。この際、そのまなざしは、(サルトルの“まなざし・羞恥論”におけるような)単なる身体的被視存在にではなく、単なる身体以上の役柄存在としての主体を出現させるのである[廣松 1972 157-66]。一望監視装置における中央監視塔のまなざしは「囚人」という役柄存在に向けられていたのであり、日常生活に分散化したパノプティコン・ダイアグラムは個々の多様な領域で諸個人が担うそれぞれの役柄存在を対自化させ、役割期待に応答すべく自己拘束する主体を形成する。また、語る者は、役柄存在としての自己の“真実の内奥”を語るものであり、他者へ語るという役割行動をなす自己が同時に語られる内的自己でありうるような(自己=自己)の同一性を個的身体以上の役柄存在としての身体的場所に成立させるのである。

役柄存在としての諸主体は、個々の社会的領域においてしかるべき役割を遂行しうる主体へと規律化される。この期待される役割の中に感情もまた含まれるのである。

4. 近代家族と感情

(1) 規律化の場としての家族 — 近代社会をそれぞれの領域での規律化の実践と把握した場合、家族空間は特別の機能を担うことになる。各領域での規律化といっても、例えば、WEBER[1975 123-26]が出来高制による生産労働を担う主体は無前提的な主体ではなく、それなりの心情—労働の自己目的化というプロテスタンティズム禁欲倫理の日常生活化の結果—を身につけた主体であらねばならないと言うように、それが効果的に成されるためには、その素地をすでに身体化した主体が必要である。近代社会はこの任務を家族と学校に割り当て、一挙手一投足への「配慮」とそれを規律化する場としての家族には、様々な知(医学・衛生学・教育学あるいは礼儀作法やダイエット法など)とそれらを制度的形象に固定化し実践する国家権力が介入する[Turner 1984 159-63, Perrot 1988]。近代社会はこの二つの領域を通じて「子供」さらには「青年」を主題化・発見する[Ariès 1980]ことになる。近代家族において遂行される意図的・無意図的な「子供のしつけ・教育」の内容は、食べ方、寝かた、着かた、話し方、振る舞いかた、といった具体的で文化相対的な諸行動様式およびそれらを枠付ける分割可能で計量可能な時間・空間観念の習得まで様々であるが、「感情教育」もその Disziplin に含まれている。どのような状況で笑い、どのような状況で悲しみ、どのような状況で恥じるのか、それら感情規則の基本的な使用を習い覚えるのである。

(2) 近代家族と愛情 — 近代社会という規律社会での枢要な機能を担う家族において、その構成員はみずからの行為(市場労働、家事、育児、教育、性生活)を自然な感情、特に愛情・友愛に結びつけて了解し正当化する。家族はまさに公共圏に対置しフマニテートを開花する場として思念される親密圏である[Habermas 1973 67-8]。この親密圏については国家権力と資本の増殖によるその周辺化という問題[Habermas 1973 207]を論ずべきではあるが、ここではそのための先決問題であるところの親密圏としての家族の成立それ自体を問題にするにとどめよう。なぜなら、前述した感情社会学の知見からも明らかなように、感情は生理的でも自然的でも個人的でもなく優れて社会的なものであり、しかも——もっぱら家族関係内部で発現する感情が“自然”で“persönlich”なものとして近代的感情経験の根幹をなす所以であるが——近代社会・国家は家族を“感じる主体”が生産・再

生産される初期的・恒常的な社会領域としてるゆえに、近代家族とそこにおける親密感情の社会的歴史的成立（——それは「国家が国家として機能しうるための特殊な支配関係」「国家権力がそこに根を下ろしにくる、可動的で具体的な土壌」[Foucault 1984b 170]である日常生活内在的な権力関係の場の一つの成立である——）の問題は近代的感情経験の基幹をなすからである。

SHORTER[1987]は近代家族の形成を「感情革命」に求める。感情革命は三つの分野で展開された[Shorter 1987 3-22]。1)男女関係：配偶者選択ならびにその関係維持をロマンティック・ラブに起因させる。2)母子関係：母親の理性的価値順位の中で子供の幸福が絶対となり、それを母性愛に起因させる。3)家族と周囲の共同体との間の境界線：家族のプライバシーと愛情生活が優先され、周囲の共同体へのコミットが低下し、家族は内閉する。それが家庭愛とされる。SHORTERによると近代家族はこれら三つの関係における愛情の創出から成立したということになる⁽³⁾。では、愛情を経験する場面をもうすこし微視的に見るとどうだろうか。

感情の間主観的構成という立脚点からするとこうなる。伝統社会において、例えば、男女関係・配偶者選択という婚姻にまつわる諸行為が為される場合、その状況（もちろん当該行為も含む）を説明可能的に意味付与する準拠枠は財産やリネージ、「家族の利害や持参金の額」[Shorter 1987 17]であった。感情革命以後「人々の方法」は変わる。それら諸状況を伝統的規範によってではなく、愛情関連的に秩序化することが一般的になる。つまり「愛ゆえに当然……する」「……するのは愛しているからだ」という具合に、状況・行為を愛情化し「愛」という現実を構成するのである。この事態は愛情に関する感情規則の使用が変化したということである。いわば、家族運営の諸行為を前にして人々が愛情に関する感情規則を自然に使用し、自分自身を“愛する主体”として構築するようになった時、近代家族が成立したといえよう。

FLANDRIN[1987 23-50]は、16世紀の出版物と現代のその書名を比較する中で、16世紀初頭には個別的な愛人同士を結びつけている具体的な関係であった「愛」が、抽象化されていき、普遍的現実・普遍的存在としての「愛というもの」に変容した、と述べ、さらに「現代人の愛の世界は自己中心的であり」、「対象である相手を犠牲にして行為そのものにますます大きな関心を向ける傾向」があると述べている。つまり、愛情それ自体、あるいは愛するということそれ自体が対象化され、追求されるべき価値となったのである⁽⁴⁾。この事態は感情の主題化・自律化の現われのひとつであり、それは領域適合的に感情経験をするよう規律化された主体の成立と相即する。

(3) 規律化の効果としての家族 — 近代家族の領域で感情規則の再編制が生じたとしたなら、次の問題は「いかにして変容したか」である。この問は、近代社会の諸領域が完全に分断されたものでない以上、それぞれの領域でのそれなりの主体化を促す規律化実践の具体的有様をつぶさに考察することによってのみ、解答が与えられるものであるが、さしあたっては、近代家族が子どもを中心に組織され、また資本制社会は「主婦」の形成によって確立されたということに着目し、家族という舞台で母親を母性愛の主体へと規律化した実践を取りあげよう。

18世紀以前には乳母への託児が広く民衆慣行としてあった。そこでは育児について「女性だけがはたすべきだとされる母親としての使命」はなく、「『子供にかなった』態度も、小さきものを『母親の立場で扱う』ことも、衛生観念のしつけもなかった」[Duden 1986 19-20]。母性愛と呼べる心的態度は存在しなかったのである[Badinter 1981]。子

供がおかれる環境は劣悪で、幼児死亡率も高かった。それが出生率低下による「子供」の資源化を背景にして、託児慣行の禁止が謳われるようになる。子供の養育法への市民的改革運動、教育学言説、児童保護法の制定など様々な実践が為され、母親と子供の接触は緊密になり、母親の役割は増大する。そこでこの役割を「女性の『自然的規定』として広めること」[Duden 1986 20]、つまり母性愛が必要とされたのである。「子供の弱さという観念」[Ariés 1980 239]に基く「いたわりや可愛がり」と「救済の対象」としての子供への「しつけや教育」、この二つの行為を矛盾なく統合しそれに根拠を与えるもの、それが母性愛の形成であった。そして母性愛の一般化に伴って、今度は母性愛なき母親（主に下層階級）の排除－感情経験の政治－が展開される。つまり親権の剥奪であり、子供の保護・施設収容であった [Perrot 1988 33-5]。この段階にいたると、社会的習得物（ハビトゥス）である母性愛は確固たる「文化資本」として作用し始めたとも言えるかもしれない [宮島 1987]。このような実践を通じて、母親は母性愛の主体となるよう規律化されていったのである。

近代家族は、その成員が愛情経験の主体として規律化されることを通じて、成立し運営される。近代家族といわれるものを実質的に構成する諸行為や諸関係は、「愛情」として意味付与されることによってその根拠を得て、安定的な制度へと内閉するわけである。この意味で感情は制度を作りあげるともいえよう。そして、この機構（もちろん、どの感情がどの程度主題化されるかは異なる）は家族という制度だけではなく、近代社会の他の諸領域でも見られるのである。官僚制はなにもすべての感情を抑圧し、メカニク的な業務遂行のみを要請するわけではない。官僚制適合的な感情状態を官僚的主体は自然に経験するよう規律化されているのであり⁽⁵⁾、単に抑圧概念ではすまされない問題がある。工場・学校・軍隊・市場そして公共の集りの場においても同様である。詳細な検討は今後の課題として、最後に次のことを確認しておこう。

それぞれの領域で適合的な感情経験を人々がするということは、相互作用の次元では、具体的他者・一般化された他者からの期待に沿った感情を人々が作りあげることである。ここではこういう感情を、こうすればこういう感情を期待どうりに人々が経験するということである。それはとりもなおさず、感情を主題化し、それを合理的計算の中で秤量するということである。つまり感情の計算可能性の増大である。個々の領域でそれなりの感情が、例えば家族では愛情が、株式市場では欲得が計算可能となり、それに照準した合理的行為（個々人の印象操作から国家権力の発動まで）の基盤が整備され、そのエコノミーが高度化するのである。

近代社会においてはそれぞれの領域でそれぞれの合理化が進み、それぞれの規律化によって、それなりの内面的にも計算可能な主体が形成される。その主体は、それぞれの領域的な感情規則を文脈的に使用して感情を作りあげる、例えば家庭では「恋愛・子供への愛情・家庭愛」を、職場では「冷静・笑顔・愛想」を、軍隊では「義務感・愛国心」等々を産出する。この“感じる主体”は適材適所に諸々の感情を配置しなければならない。そのため諸個人は感情経験を－広義に－統御する主体とならねばならないのである⁽⁶⁾。

5. 結——感情・主体・そして・権力

「感情は、社会空間を様々な感情的充当に」――分節化し秩序化することで、社会的なるものの構造化を行う」[Gerhards 1986 769]が、また逆に多様な戦略を持つ権力作用により歴史的に組織され、形成された装置なのである。近代社会はそれぞれの領域でそれなりの

感情を経験する主体を形成し、それを通じて自らの構造化を果たしている。その際に、内的で自己自身に固有なものとして意識される感情経験といえども計算可能性の範疇に組み込まれ、“感じる主体”は、具体的な権力行使の実定的な台座となる。「権力は、性（感情）に対して、同時に理解可能性の形態としても機能すべきひとつの『秩序』を課したのである」[Foucault 1986 109、（）内は引用者]。

本稿では紙数の都合でいくつかの論点が論じきれないまま残された。19世紀以後現在に至るまでの社会の変貌と連動した感情経験と感情を貫く権力の具体相の変貌、感情の諸相・諸次元の解明など残された問題は多々あるが、それらを十分に究明することによって、感情・主体・そして・権力の緊密な連関を明らかにすること、そして“今、ここで、生きる”われわれの感情とそれにまつわる多様な言説を捉え返すことが、今後の課題である。

補注

(1) 例えば、我々なら「悲嘆」「寂しさ」という感情を経験するような状況に対して、その内的経験を「病い」「悪霊の仕業」として処理する（「感情」として解釈しない）文化が存在する[Levy 1982]。

(2) 自明な感情経験それ自体がすでにあるものを排除しつつ成立する、という意味での感情経験の政治性が顕著に現出する例として、文化摩擦による精神障害の発生が挙げられる。荻野[1981]は、異文化接触（特にテクノロジー文明の既存文化への進出）により土着文化の成員に分裂病が発症すると述べている。この論に、精神病を感情逸脱とその修正努力の結果とするTHOITS[1985]や分裂病を自明性の喪失とするBLANKENBURG[1978]の见解を重ねると、文化摩擦による精神障害とは、異文化間の接触が成員の感情規則使用の自明性を揺動させ、感情逸脱を増幅し、規則使用主体の文化的同一性を破壊した状態と言えるかもしれない。但しこの場合でも重要なのは、ある文化の感情経験の自明性が事実に拘束力をもって感情逸脱者を政治的に排除する過程である。

(3) 山田[1987]は近代家族の形成を、①愛情の公的空間、市場からの排除、②愛情への社会的価値付与、③愛情の経験と表出の特権的空間（家族）への封印、という三つの契機に求めている。

(4) 近代社会で主題化され・価値付けられたのは愛情だけでなく感情一般である。18世紀に「『感情』という言葉がはやり始め」「何を言い表わすにつけ、『感情』は欠かせなかったし、これさえあれば何でも正当なものとしてまかり通った」「真の人間性の刻印をおすものは何か？ つねに感情」[Friedell 1987 239]であった。

(5) WEBERの議論において「規律」「官僚性」「感情」の三者の関連は以下のように整理される。規律とは「受けた命令を徹底的に合理化された形で——すなわち計画的に訓練された・精確な・一切の自分が抱いた批判を無条件に排除するとき仕方——遂行することと、もっぱらこの遂行の目的のみに内面的志向をたゆまず集中すること」[Weber 1962 503]であり、規律化とは、行為を合理的計算可能性を有するものとする、また「献身」といった感情的色彩をもった態度を「その目標とその通常の内容からすれば『物象的 sachlich』な性格をもっており、共同の『物象 Sache』への・合理的に目指された『成果 Erfolg』への献身を意味し、人格そのものへの献身を意味しない」ようなものとする、こと[Weber 1962 505]である。事象的なものに向けられ計算可能な感情・情緒はむしろそこで利用されるのであり、排除されるのは計算不可能な・合理的な（目的—手段系列）を攪乱させるような感情である。『怒りも興奮もなく』sine ire ac studio という原理が支配

し、「愛や憎しみおよび一切の純個人的な感情的要素、一般に計算不能なあらゆる非合理的な感情的要素を、職務の処理から排除する」[Weber 1973 269]官僚制においても、それを支える規律化された個人は計算可能で手段化しえる感情を“自然で、persönlich”なものとして経験・主題化しているわけである。

(6) 感情統御の歴史的生成については、ELIAS [1977/78] がテーブルマナーや排泄物への対応の変遷を通じて明らかにしている。

- Ariés, Ph. 1980 『<子供>の誕生』 杉山光信・杉山恵美子訳 みすず書房
- Badinter, E. 1981 『プラス・ラブ』 鈴木晶訳 サンリオ出版
- Berger, P./Berger, B./Kellner, H. 1977 『故郷喪失者たち』 高山・馬場他訳 新曜社
- Blankenburg, W. 1978 『自明性の喪失－分裂病の現象学－』 木村敏他訳 みすず書房
- Breuer, S. 1986 『規律の進化－マックス・ヴェーバーの前合理主義世界論における合理性と支配の関係』 諸田實・吉田隆訳 未来社
- Denzin, N. 1983 "A note on emotionality, self, and interaction" A. J. S. 89 402-9
- Duden, B. 1986 「資本主義と家事労働の起源」 『家事労働と資本主義』 丸山真人編訳 岩波書店 所収 1-47
- Durkheim, E. 1978 『社会学的方法の規準』 宮島喬訳 岩波書店
- Elias, N. 1977/78 『文明化の過程』 上・下 中村元保・吉田正勝他訳 法政大学出版会
- Flandrin, J-L. 1987 『性と歴史』 宮原信訳 新評論
- Foucault, M. 1977 『監獄の誕生－監視と処罰－』 田村俤訳 新潮社
- Foucault, M. 1978 「権力の眼」伊藤訳 『エピステーメ』 4-1 156-72
- Foucault, M. 1984a 「主体と権力」渥海訳 『思想』 718 235-49
- Foucault, M. 1984b 『ミシェル・フーコー 1926-1984』 福井・桑田・山本編 新評論
- Foucault, M. 1986 『性の歴史 I 知への意志』 渡辺守章訳 新潮社
- Friedell, E. 1987 『近代文化史 2』 宮下啓三訳 みすず書房
- Gerhards, J. 1986 "Soziologie der Emotionen" KZfSS 38 760-71
- Giddens, A. 1986 『社会理論の現代像』 宮島喬他訳 みすず書房
- Habermas, J. 1973 『公共性の構造転換』 細谷貞雄訳 未来社
- Heidegger, M. 1976 Gesamtausgabe 1, Band 9. Frankfurt a. M.
- 廣松渉 1972 『世界の共同主観的存在構造』 勁草書房
- 廣松渉 1986a 「表情現相論序説」 『現代思想』 14-2 202-30
- 廣松渉 1986b 「役割理論の再構築のために・上」 『思想』 743 1-28
- Hochschild, A. R. 1979 "Emotion work, feeling rules and social structure" A. J. S. 85 844-53
- Hochschild, A. R. 1983 The Managed Heart : Commercialization of Human Feeling. Berkeley
- Kemper, Th. D. 1978a A Social Interactional Theory of Emotions. New York
- Kemper, Th. D. 1978b "Toward a sociology of emotions : Some problems and some solutions" The American Sociologist 13 30-41
- Kemper, Th. D. 1980 "Sociology, physiology, and emotions : Comment on Shott" A. J. S. 85 1418-23
- 木田邦治 1988 『近代化と教育』 修士論文 慶應義塾大学社会学研究科（未公刊）

- Leiter, K. 1987 『エスノメソドロジーとは何か』 高山真知子訳 新曜社
- Levy, R. 1982 "On the nature and function of the emotions : An anthropological perspective" *Social Science Information* 21 511-28
- Marx, K. 1953 *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie/Rohentwurf 1857-1858*. Berlin
- Marx, K./Engels, F. 1963 『マルクス＝エンゲルス全集 第三巻』 大内・細川監訳 大月書店
- 宮島喬 1987 「文化による支配、文化による選別」 『文化と現代社会』 見田・宮島編 東京大学出版会 所収 9-34
- 荻野恒一 1981 『「文化摩擦」と精神病理』 新曜社
- 岡原正幸 1987a 「感情と社会－感じることの社会性－」 『日常生活と社会理論』 山岸健編著 慶應通信 所収 153-74
- 岡原正幸 1987b 「感情経験の社会学的理解」 『社会学評論』 151 17-31
- Perrot, M. 1988 「私的領域と権力」 福井訳 『思想』 765 25-39
- Reisenzein, R. 1983 "The Schachter Theory of Emotion : Two decades later" *Psychological Review* 94 239-64
- Sartre, J.P. 1957 「情緒論粗描」 竹内芳郎訳 『サルトル全集 第23巻』 白水社
- Schachter, S./ Singer, J.E. 1962 "Cognitive, social and physiological determinants of emotional state" *Psychological Review* 69 379-99
- Shorter, E. 1987 『近代家族の形成』 田中・岩橋・見崎・作道訳 昭和堂
- Shott, S. 1979 "Emotion and social life : A symbolic interactionist analysis" *A. J. S.* 84 1317-34
- Shott, S. 1980 "Reply to Kemper" *A. J. S.* 85 1423-6
- Smart, B. 1983 *Foucault, Marxism and Critique*. London
- Thoits, P. 1985 "Self-labeling process in mental illness : The role of emotional deviance" *A. J. S.* 91 221-49
- Turner, B.S. 1984 *The Body & Society*. Oxford and New York
- 魚住洋一 1985 「感情と空間」 『新岩波哲学講座 4 世界と意味』 岩波書店 所収 260-84
- Weber, M. 1962 『支配の社会学 II』 世良晃志郎訳 創文社
- Weber, M. 1973 「支配の社会学」 世良訳 『政治・社会論集』 河出書房新社 237-301
- Weber, M. 1975 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」 大塚訳 『世界の名著 ウェーバー』 中央公論社 95-293
- Weber, M. 1980 *Wirtschaft und Gesellschaft*. Tübingen
- 山田昌弘 1986 「情緒社会学序説」 『東京学芸大学紀要』 38 21-30
- 山田昌弘 1987 「近代家族形成における情緒の二つの意味」 『現代社会学』 24 110-32
- Zaretsky, E. 1980 『資本主義・家族・個人生活』 グループ7221訳 亜紀書房